パロディ落語「牡丹灯篭 アフター・ストーリー」

袴垂レ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
パロディ落語「牡丹灯篭　アフター・ストーリー」

【Ｎコード】
Ｎ８１９４Ｏ

【作者名】
袴垂レ

【あらすじ】
江戸三大幽霊の一人として有名なお露さんはあの世でも呼び声高く、真似をするものが後を絶たない時期があった。中には、盆も近くなると、実際に牡丹燈籠を持って生前の想い人の元を訪ねる者もいる有様。１０年ほど前に亡くなったお津代さんもお露さんに憧れ、先ごろ亡くなった乳母を連れて生前の想い人古三郎の元を訪ねるが…。

（前書き）

怪談『牡丹灯篭』の一部「お露と新三郎」のその後を妄想して書いた、自称創作落語の脚本です。

果たして創作落語を小説と同等に扱っても良いかという問題がありそうですが、小説自体に非常に広い意味があるので、特に問題はないかと思って登校しました。問題がありましたらおっしゃってください。適宜、編集・削除します。

本作は、コメディ・タッチの文章を書く練習をすることを目的としている面が強いです。読んで「面白い」と思われるかどうかも非常に気にしています。コメントをいただけますと幸いです。

世の中には色々な集まりがあるものです。ご近所には町内会、奥様方の井戸端会議、大学にはサークル、ゼミ、といった具合に。

このように世の中には色々な集まりがあるものですが、それはこの世に限ったことではございません。冥土にも幽霊たちの集まりというのがありまして、その中でもやはり何かと話題に上る人物がおります。

さきごろ、閻魔様が編者となりまして、「冥土番付」なるものを作ったことがあるそうですが、あの世には東も西もありません。そこで、一応生前の性別で持って区分けをし、東を男、西を女として番付を作ったそうです。　東方（ひがしがた）、横綱・菅原道真、大関・平将門、といった具合です。一方の　西方（にしがた）と参りますと、やはり何といっても、横綱はイザナミノミコト、元祖ヤンデレにございます。あと強いのは、やはり江戸三代幽霊、お菊さん、お岩さん、お露さん。中でも、お露さんはお美しいまま亡くなったため幽霊業界でも呼び声高く、お露さんの真似をする者が後を絶ちません。

ここに、お　津代（つよ）さんという幽霊がいます。加賀藩は　前田重教（まえだしげみち）公　（1）が家中に、長岡半左衛門という方がおりまして、正室の奥方様よりお生まれになったご息女にございます。半左衛門様が江戸ご勤番を預かった折、お父上とご同行されましたが因果の始まり。清元　（2）のお師匠の元へ通ううち、同じように稽古に参っておりました　古三郎（こざぶろう）という　大店（おおだな）の手代　（3）に惚れ込んでしまいました。しかし、まもなくお津代さんは亡くなってしまいます。

幽霊の世界へ迎えられたお津代さんは、このごろ亡くなった乳母とともに、古三郎への思いをいかに遂げようかと画策する毎日にございます。

津「婆や、婆やぁ」

婆「はい、何でございましょう」
津「縮緬細工の牡丹芍薬が付いたお燈籠を、私は所望いたします」
婆「はい、差し上げたいのは山々でございますが、何せ銭こがございませんもので」
津「婆や、いつも申しているでしょう。お国が知れますから、言葉遣いには気をつけなさい、と」
婆「はい、申し訳ございません」
津「渡し賃を皆様から十分いただいておりましょう。二人で12文もあれば十分でしょう。残りはないのですか」
婆「余分な渡し賃は、こないだ嬢様が『お菊さんの真似がしたい』って駄々こねられましたもので、そのときに使ってしまいました」
津「ですから、言葉遣いに気をつけなさいと何度申せば良いのです。……どこにそのようなお金がかかったのです」
婆「いやぁ、何でも嬢様が『お菊さんのお皿はお旗本が家宝とまでお呼び申したものです。当家の恥とならぬよう名器を用意なさい』
（4）と言いなさるもんですから、私が方々探しました。冥土にはそんな名器は見つかりませんで、浮世へ降りましたときに立ち寄ったお茶屋さんで買ったお皿に2両の銭こがかかってしまいました」
津「言葉遣い。次は申しませんよ！……ですが、あのような皿になぜそのようなお金がかかったのです」
婆「はい、そこのお茶屋では、えー、お猫様を飼ってございまして、ちょうど私たちがお茶屋に着いたときは、あのー、お猫様がお夜食を召し上がっておいでした。いっしょに来てもらっていた目利きの旦那が言うには、『柿右衛門に間違いございません、いい仕事してますねぇ』とのことで、買い取ろうと思いました」
津「どこから申せばよろしいやら。まあよいです。続けなさい」
婆「手持ちには限りがございます。お茶屋の主人は、多分猫の皿が高いものだとは知らんと思いまして、寝ている主人を起こしまして、『猫を2両で買わせてください』とお願いしました。不機嫌そ

うにしながらも、了承してもらえました。『皿が違うと餌も食べにくいでしょう』と言って皿を持っていこうとすると、『これは初代柿右衛門の名品でございますから』と、取り返されてしまいました。主人曰く『こうしておりますと、時々猫が2両で売れます』とのことで　（5）」

津「へぇ……。まあ、1枚くらい多めに見ましょう。他の8枚はどうしたのです」

婆「浮世へ降りましたときに立ち寄ったお茶屋さんで――」

津「もういいです。あなたに頼んだ私が馬鹿でした。……もらってきた猫はどうしたのです」

婆「はい、冥土に連れて来ましたところ化け猫になってしまい、人の言葉も話すようになりました。事情を聞いてみますと9匹は同じ母猫から生まれおりまして、母猫が三味線にされてしまったとのことでした。猫たちが『仇を討ちたい』と言いますもんで、『仇て誰ぞいね？』と聞きましたところ、嬢様が習っておいでた清元のお師匠さんが仇だということが分かりました。そこで、お師匠さんのところに9匹とも置いて参りました」

津「どうでもいいことにばかり気が回りますね、あなたは」

婆「今では、9人の愛人ととっかえひっかえ　（6）」

津「聞いてません、そんなこと」

仕方が無いので牡丹灯籠を友人から線香5本でレンタルします。早速浮世へ下りようということになったのですが、このお津代さん、どこか抜けたところがございまして、牡丹灯籠を手に入れられた嬉しさもあったのでしょう、気が急くあまりお盆より少し早め、今の暦でいうところの8月10日に浮世へ下りてしまいます。そうこうするうちに八ツの鐘　（7）が鳴り始めます。

お津代さんが亡くなった当時手代だった古三郎も今や番頭を務めるまでになりました。古三郎が番頭を務めるお店では行燈の光がすっかり消えております。そんな中、縁側に腰かけ涼んでいる者が一

人。その者、伴吉と申しまして、まだ小僧ながらなかなか頭の回る者でして、「将来大物になる」と町内で噂されるほどです。
飛び交う蛍が闇に映え、冴え渡る月夜とともに幻想的な雰囲気を醸し出します。木々のざわめきがキリギリスの声と調和し、耳の奥深くでこだまします。伴吉が耳を澄ましておりますと、カランコロンという音が生垣の向こう側から聞こえてきます。なかなかませた小僧にてこのころよりすでに女性に興味を持ち、盆の夜に下駄の音と来ると瞬時にお露さんを連想する。ドキドキしながら待っていると、似て非なる者がやってきたわけで。
先へ立つのは年頃３０くらいのどろくさい年増にて、華麗な牡丹灯篭にはまったく似合わず、その後から１７、１８と思われる娘がついてくるが、ガリガリにやせこけた足をしております。

伴吉　（物好きなやつが、うちの店にいたもんだ）

伴吉は持っていた手ぬぐいで口をおさえ、笑いをこらえます。とはいえ、こんな夜遅くに女が出歩くはずもなく幽霊に違いないと伴吉は思い、目はあらぬ方向へ向け、気づかれぬよう細心の注意を払いますが、そこは幽霊、人の放つ生気というものには敏感なのでしょう、すぐに伴吉を見つけます。

婆「夜分遅くにごめんくださいまし」

丁寧な口調から顔出す訛りが余計に笑いを誘います。伴吉はやっとのことで息を吸いつつ、応対します。

伴「へ、へい、いらっしゃいまし」
婆「伴吉さんとはあなた様でごぜぇりますかぇ」
伴「あたしが伴吉にございます」
婆「古三郎様より、あなた様がよう可愛がられていると聞いとおり

ます。古三郎様はあんまりな方にごぜぇります。清元のお稽古先ではぁ、あんなにも嬢様と親しくしてくだすったにも関わらず、こちらから文をお送りしてもご返事をくださりません。お稽古先では、『いつかいらっしゃい』とお約束遊ばしたのに、まったく音沙汰もごぜぇりません。無礼とは承知ですが、どうぞ古三郎様にお取次ぎいただけませんでしょうか」

伴「『いつかいらっしゃい』とは……う、は、はぁ、どうしたものやら…」

伴吉は実に頭の切れる小僧でして、それは幽霊を前にしても変わりません。殊に損得勘定は非常に早く、自分がお店で出世するためには何が必要かを瞬時に見抜く能力に長けております。古三郎もお露さんには一目くらい会いたいとは思っても、こんな地の底から這い出してきたような幽霊には一目さえ会いたくもなかろう、古三郎を幽霊に会わせるのも面白いが、ここは幽霊を追い返し、古三郎に恩を売っておいた方が後々役立つだろう、といういやしい根性を見せます。

伴「ご言い分、ごもっとも様でございますが、ただいま番頭さんはお得意様のご宴会に出ておいでで、今晩はお戻りになりません」

婆「　（お津代さん、婆やに耳打ちする）ええ、はいはい、左様でごぜぇりますか。急にうかがって申し訳ございませんでした、伴吉さんのおっしゃることもごもっとも様にごぜぇります、それでは明晩再びうかがいますので、どうか必ずやお取次ぎください、と嬢様は申しておいでにごぜぇります」

伴「へい、かしこまりましてございます。えぇ、ではご機嫌よう、明晩をお待ちしております、さようならー……、へへへ、行っちゃったよ、適当に嘘を言うと本気にしてやがんの、間抜けなやつらだ。さてさて、面白いことになってきたぞ」

あくる朝、伴吉は朝一番に古三郎の元にやってきます。

伴「番頭さん、番頭さん」

古「こんな朝早くから何事ですか、伴吉。お前さんのことだから、どうせくだらないことでしょう。私は今お帳面を見るのに忙しいんですからね。」

伴「いやー、さすがは番頭さんだ、すごいなぁ、よくお分かりで。くだらないことですよ、清元のお稽古先でいっしょだったお嬢さんのことですから」

古「　（そでを捕まえ）ちょ、ちょっと待て。今何と言った」

伴「いえいえ、くだらないことですから　（そでを払って行こうとする）。さようなら」

古「　（今度は襟首を捕まえて）待てと言っているだろう。そのお嬢さんてぇのは、まさか長岡様んとこのお嬢さんじゃあるまいな」

伴「長岡様ってんだ、あのお嬢さん。あんなごぼうみたいなの初めて見たなぁ。」

古「こいつ知ってやがんな…。　（襟首をつかんだ腕を引き寄せ、もう片方の腕で伴吉の腕をつかむ）だがな、嘘は言っちゃあいけねねぇな伴吉、そのお嬢さんは１０年以上も前にお亡くなりになったんだ。伴吉やぁ、お前さんいつそのお嬢さんに会ったんだい。」

伴「えへっ、急に猫なで声になってやがら」

古「　（腕に力を入れる）い・つ・会っ・た・ん・だ・い」

伴「いたた、ひどいことするなぁ。幽霊が怖いんですか？」

古「私ゃね、幽霊なんぞ怖かない。私がこの世で恐れるのは、火事と旦那の雷、そしてごぼうのような女だ。いいかい、伴吉、お前さんの見聞きしたことを、順を追って話しなさい」

伴吉は昨夜のできごとを事細かに話しました。特に、お津代さんの容貌について。

古「あぁ、間違いないね、お津代さんだ」
伴「今日は１１日ですね、番頭さん　（右手を差し出す）」
古「……」
伴「１６日はまだ先ですね、番頭さん　（左手も差し出す）」
古「嫌なやつだねぇ、お前さんは。『大欲は無欲に似たり』と言ってねぇ、お前さんのような欲を張るやつのところには結局何も残りゃしないもんだよ」
伴「『地獄の沙汰も金次第』とも言いますよ」
古「ええい、ああいえばこういう！お前さんの助けなんか借りるもんか！」

啖呵（たんか）切ったはいいものの、特に策はありません。さて、どうしたものかと考えているうちに正午も過ぎてしまいました。

古「えぇ…、手代のうちから清元なんぞに手を出しちまったのが悪かったか…」
「ごめんだくさいまし」
古「へい、いらっしゃいまし、ってなんだ、　宇斎（うさい）先生か」
宇「なんだって、なんですか番頭さん、お得意様に向かって」
古「お得意様たって、あんた、借金のお得意様でしょうが。しかも、あんたのご兄弟がお得意様、本当の意味でのお得意様ですよ、まあお得様だってぇことでこれまでずっと私のお給金で面倒見てきたってだけだ。それにね、あんた易者のくせに言うことがどれも見当違いだってんで、町内じゃあね、宇斎は　『胡散臭い』（うさんくさい）の略だって、もっぱらの噂だよ」
宇「ははぁ、胡散臭いとは…、上手いこと言いますね、ははは」
古「他人事のように言いやがる」
宇「というわけで番頭さん、３両ほど貸してくれませんかね　（右手を差し出す）」
古「どういうわけだよ…」

宇「ついでにもう3両　（左手も差し出す）」
古「なんだい、そのついでってのは、どいつもこいつも寄ってたかって…、ダメだよあんた、先年貸した3両はどうしたんだい？」
宇「こないだ、本所近くへ釣りに行ったんですがね、そこのお堀で珍しく馬鹿釣れしまして。調子に乗って釣っているうちに、暮れ六つも過ぎまして、お月さんが顔出すようなときと相成ります。こりゃいけないと思い、　魚籠（びく）を持って立ち上がった矢先、どこからともなく『置いてけ、置いてけ』という声がします。辺りを見回しても人っ子一人いやしない。耳をそばだててよくよく聞いてみるてぇと、どうもお堀の中から声がすると分かったときにゃ、冷や汗が穴という穴からぶわーっと噴出しまして、逃げ出しました。そんときに『3両置いてけ、3両置いてけ』てぇ声がしましたもんで、お借りした3両も置いてきちまいました　（8）」
古「そんな意地汚い幽霊がいるもんかね…、その前の年の3両は？」
宇「へぇ、その前の年も所用ありまして本所に参ったんですけどね、そりゃ寒い晩でございまして、帰りに蕎麦屋さんに寄ろうと思っておりましたが、帰りはすっかり遅くなりもう八つも過ぎておりましたもんで、さっぱり屋台が見当たらない。そうこうするうちに、闇夜に灯りが一つぽっと浮かんでいるのが見えたもんで『地獄に仏』と近寄り、声を掛けるが返事がない。よぉく見ると、主人がいなねぇんです。『小用にでも行ったんだろう』ってんで一服してたんですが、いくら待っても主人が帰ってこない。そのうち七つの鐘が鳴ったんですが、あたしゃ、異なことに気がついた。屋台のどこを探しても油さしが見当たらなねぇんです。『するってぇと、この灯りは消えずの行燈かい』ってんで、身の毛もよだち、急いで帰って参りました。そんときにお借りした3両を落っことしちまいました
（9）」
古「これじゃ本所七不思議　（10）だよ…、ときに宇斎先生、あんたそこまで怪談に詳しいんだから、幽霊を追い返す方法の一つや二つくらい知らないかい」

宇「なんだい番頭さん、あなた幽霊に憑かれたんですかい」
古「いえね、ほら、私が以前稽古に行ってた清元のお師匠さんんとこにさ、長岡様んとこのお嬢様も通っておいでたでしょう」
宇「ああ、あのごぼうの」
古「そうそう、ごぼうの。で、あのお嬢さん、後で知ったんだがね、どうも私にお熱だったらしく、１０年以上前に亡くなられたんだが、昨夜お盆がまだだってぇのに、うちの店にお越しになったらしいんだよ、幸いにして伴吉が適当に言い繕って追い返したみたいなんだがね、今晩にもまた来るらしいんだよ」
宇「いやー、番頭さんもなかなかやるねぃ、よっ、色男。あなたもう３０もとうに過ぎたんだし、そろそろ嫁を娶って通い番頭になってもいいんじゃないですかい。このさい、ごぼうでもにんじんでも良いから子供の一人でもこさえたらどうです。番頭さんは若白髪のごま塩頭　（１１）だから、きっと金平　（ごぼう）が生まれるんじゃないですかね」
古「なに言いやがんだ！あんた、あのお嬢さんの死に様を知らないのかい？」
宇「いえ、存じ上げませんね」
古「いいかい、あのお嬢さんはな、あんまりにも色黒の痩せぎすだもんで、野良犬に柳と間違われて小便をかけられたんだ、いえ、『柳腰』とはよく言ったものだけれど、あれはいくらなんでも細すぎる、柳のお化けだ。でまあ、かけられたところにちょうど傷があって、それが元で病にかかりついにお亡くなりになった、こういうわけなんですよ」
宇「へぇ、犬の小便でおっちんじまうってのは、それはそれはセッチン　（世知）辛い世の中ですねぇ」
古「ろくでもねぇことばっかり言いやがる…、で、宇斎先生、何か良い手立てはないもんですか」
宇「へい、幽霊除けには鰯の頭がよろしいでしょう」
古「おいおい、それじゃあ節分の鬼じゃないかい。第一、こんな暑

い時期に鰯なんて売ってないじゃないか」
宇「煮干も鰯でしょう」
古「そんなもんでいいのかね…」
宇「番頭さん、易者の私の言うことが信じられませんか」
古「うーん…、胡散臭いねぇ…」
宇「地獄に落ちるわよ！」
古「な、何だってんだい、ええい、分かったよ、あんたを信じるよ。どうせ、その代わりに3両貸せって言うんでしょ？いいでしょう、ただし3両は後払いですからね」

藁にもすがるというのはこのことで、小僧を日本橋の魚河岸へ使いに出し乾物屋さんで煮干を買ってこさせると、その頭を四方の出入り口に置きました。
さて、その晩…

――カラン、コロン

宇「おお、来た来た、番頭さん、本当に来ましたね、幽霊」
古「だから、来るって言ってんでしょうが、本当にあんな煮干なんかで大丈夫なんですか」

案の定、お津代さんたちは煮干の上を通り抜けます。どころか、婆やは猫たちのお土産だと言って拾い集める始末。

古「ほら、言わんこっちゃない、どうしてくれんだよ、宇斎先生」
宇「まあ、落ち着いて、ときに番頭さん、あの鰯はどちらでお求めに？」
古「日本橋の魚河岸ですが」
宇「ああ、それではダメだ、鰯は目黒に限る　（12）」
古「ええい、ネタが多ければ良いってもんじゃないんだよ！って、

先生！ちょっと先生！あああもう、逃げ足だけは早いんだから…」

もはやお津代さんたちは雨戸一枚隔てたところまで来ております。

――コツコツ、コツコツ、と雨戸をたたく音。

古「ああ、ひでぇもんが来ちまった。今晩、あれといっしょに寝るってのかい、冗談じゃねぇやい」

伴「　（声を殺して）番頭さん、番頭さん」

古「あ、お前さん、伴吉じゃありませんか」

伴「えへへ、だいぶお困りのご様子で」

古「ええい、こうなったらお前さんでもいいや、何とかしとくれよ」

伴「男に二言があっていいんですかい」

古「お前、あれを見てみなさいよ、いざ間近で見ちまったらひどいのなんのって、お露さんは下男が見たときに骨と皮だって分かったけど、あれは恋人、あくまであっちが思い込んでの恋人ですけどね、そういう人の目から見ても骨と皮じゃないですか、ああ、めまいがしてきた」

伴吉、黙って両手を差し出し――

古「ええい、分かったよ、万が一、万が一にだよ、上手くいったときに宇斎先生に渡すつもりだった3両、これを全部お前にあげるから何とかしとくれ！」

伴「えへへ、まいどあり」

してやったり、と伴吉は急いで雨戸を開け縁側に飛び出すてえと、

伴「へい、いらっしゃいまし」

婆「ああ、昨夜の小僧さんでごぜぇりますか。さあ、今晩こそは古

三郎様にお取次ぎいただけますね」
伴「それが、番頭さんは持病の癪が悪くなり、今朝他界いたしました」
婆「癪て、わがまま病や　（１３）…　（お津代さん、婆の背中をつねる）あいたたた、私も癪が…」
伴「あなた何てお人だ…わがまま病いにゃちがいありませんがね、そう言っちまったら番頭さんがあんまり可愛そうだ…　（グスン）
　番頭さんは真面目なお方で、日々おやつれになりさぞお辛い思いをなさっておいでのときでも、ずっと『お店は…、お店は…』『お帳面を…、お帳面を…』とうなされておいででした。…あ、それから、『伴吉、お前はうちへ奉公に上がったときから利口な子だった、お前が早く番頭になれるよう私が取り計らってあげるから…』ともおっしゃっておいででした」
婆「あー！かわいそっ！　（大泣きする）…いたたた」
伴「　（ぷっ）そういうわけですので、さようなら！」
婆「しばしお待ちを！古三郎様はまたなにゆえにお亡くなりになったのでごぜぇりますか」
伴「へい、出入り口に煮干がございましたでしょう。今朝お味噌汁をお上がりになったところ、出がらしの煮干がのどにひっかかってしまいまして。店ではお武家様よろしく、『むう、無礼な煮干！切捨て御免！』てんでさらし首にいたしましてございます」
婆「なるほど、道理でごぜぇりますね。では、せめてご尊顔だけでも拝見させてもらえませんか」
伴「いえ、それがですね、早々に内々で葬儀を済まし、すでにお墓に　埋けてしまったのでございます。鰯でお亡くなりですから、亡骸もお足が早ようございますので」
婆「ははあ、なるほど…、　（お津代さん、婆やに耳打ちする）ええ、はいはい、左様でごぜぇりますか。伴吉さん、嬢様はお墓参りをいたしたいとおっしゃっておいでにごぜぇります」
伴「えっ、幽霊が墓参り！？いえ、こちらのことで…。」

婆「　（お津代さん、婆やに耳打ちする）ええ、はいはい、左様でごぜぇりますか。伴吉さん、嬢様がおっしゃるには古三郎様の菩提寺は谷中にあると聞いたことがごぜぇります。夜分遅く申し訳ごぜぇりませんが、お墓までご案内いただけませんでごぜぇりましょうか」

伴「よく知ってんなぁ、ここまで来ると、悪質なストーカーだなぁ…、いえいえ、こちらのこと。他でもない番頭さんのお許婚（いいなずけ）、お津代さんのお頼みとあれば、私とてやぶさかではございません。すぐに仕度して参りますので、少々お待ちを」

さすがの伴吉も幽霊が墓参りをするとは思ってもみず、内に入りしばし思案いたしましたが、そこは将来大物を約束された伴吉、すぐさま良い案が浮かびます。

伴「仕度整いましてございます。さて、ここからは私めがお津代様の先導を務めさせていただきますゆえ、どうぞこちらにお燈篭を…、へい」

　伴吉が先に立ち坂を下る、今も昔も変わらぬ谷中の寺院群にございます。

伴「こちらがそのお寺でございます。さて、この門をくぐれば番頭さんのお墓はすぐそこなんでございますが、墓参りをするにはお花やお線香の一束もご用意せねばなりますまい、誠に相すいませんが、私粗忽者にてお花もお線香も持参いたしませんもので…、はい、すぐさまお店に取って返しお持ちいたしますので。門をくぐって最初の並びを右に折れていただくと一番奥にございますお墓が、番頭さんのお墓でございます。番頭さんはお祖父様とおんなしお墓にお入りになられましたので、少々お墓が汚れてございます。どうぞ一足お先にお参りいただき、お墓を掃除していただけますと番頭さんも

お喜びになるでしょう。では、すぐに戻って参りますので……　（灯籠を渡す）」
婆「親切な小僧さんでようごぜぇりましたね、嬢様。さあさ、古三郎様のお墓に参りましょう」

伴吉の言ったとおりに行くてえと、確かに汚らしい墓が一つある。
津「古三郎様の墓…、変わり果てたお姿になってしまわれて…どうなさったものでしょうか…、ご立派なお墓にございますこと…、すぐに私もそちらへ参ります。しかし、えらく汚い墓ですこと…、戒名すら見えませんね。　（手ぬぐいで磨く仕草をする）これが、本当に古三郎様のお墓でございますか。戒名を拝見いたします　（婆や、灯篭を近づけて）…。『〇〇信女』？これは女の人のお墓ではございませんか！」
婆「ひどいものでごぜぇりますねぇ…。あれ、しばしお待ちを…、今お読みになった戒名、以前どこかで聞いたことがごぜぇります…」
津「聞き覚えが、って…、え、お待ち、私もどこかで聞いたことが…。えーと、って、これは私の墓じゃありませんか！」

お津代さん、ご丁寧に自分で自分のお墓を参ってしまったため、浮世に満足して成仏してしまいました。

＜注＞
（1）実在の人物。加賀藩9代目藩主。1741生－1786没。在位1753－1771。

（2）清元は、三味線音楽のひとつで、浄瑠璃の一種。主として歌舞伎や歌舞伎舞踊の伴奏音楽として用いられる。

（３）江戸時代の商家では、下から丁稚（江戸では小僧）・手代・番頭という三つの地位があった。１０歳前後で丁稚（小僧）として商店へ奉公に上がり、手代までは住み込みで働くことが多かった。番頭になると住み込みから解放され、自宅からの通勤が許されることがほとんどであった。特に、所帯を持ち自宅から通勤する番頭を「通い番頭」と呼んだ。所帯を持たず住み込みで働く番頭もいた。番頭になった後、暖簾分けされて独立することもあった。
参考：ｗｉｋｉｐｅｄｉａ

（４）怪談『番町皿屋敷』より。

（５）落語『猫の皿』より。

（６）落語『猫忠』より。清元の女師匠が、母猫を三味線にされた子猫が化けた者と知らず、弟子の一人とでれつく場面がある。

（７）江戸時代の時間の数え方は、日の出と日没の時間を基準に一日を１２刻に分けた不定時法である。現在の午前６時を明け六つ、現在の午後６時を暮れ六つとした。現在の午前０時を九つ（または夜九つ）、午前２時を八つ（または夜八つ）とし２時間（１刻）ごとに数が一つ減る。四つ（または昼四つ、今の午前１０時）まで数えると次は九つ（または昼九つ、今の午後１２時）に戻り、再び八つ、七つ、…と数が減っていく。
現代時間－江戸時間対照表：ｈｔｔｐ：／／ｂａｋｕｍａｔｕ．７２７．ｎｅｔ／ｉｒｏｈａ／ｍａｍｅ－ｊｉｋａｎ．ｈｔｍ
参考：花咲一男監修，２０００年刊，『大江戸ものしり図鑑』（主婦と生活社）

（８）怪談『置行堀』より。話の内容にはバリエーションがあるが、お金を取られたというものはない。

参考：ｗｉｋｉｐｅｄｉａ

（９）怪談『消えずの行灯』より。「誰も給油していないのに行灯の油が一向に尽きず、一晩たっても燃え続けているという伝承もあり、この店に立ち寄ると不幸に見舞われてしまう」という伝承がある。

参考：ｗｉｋｉｐｅｄｉａ

（１０）本所七不思議は、本所（東京都墨田区）に江戸時代ころから伝承される奇談・怪談。江戸時代の典型的な都市伝説の一つである。七不思議であるが伝承によって登場する物語が一部異なっていることから７種類以上のエピソードが存在する。

参考：ｗｉｋｉｐｅｄｉａ

（１１）白髪が混じっている状態の頭を指して「ごま塩頭」という。

（１２）落語『目黒のさんま』より。

（１２）「癪」とは、胸や腹のあたりに起こる激痛の総称である。都合が悪いときの言い訳として「癪」が使われることがある。

（癪＝言い訳と認識されていたことを示す例：落語『お見立て』）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8194o/

パロディ落語「牡丹灯篭 アフター・ストーリー」

2010年11月10日01時10分発行